石川淳「アルプスの少女」論

―〈人間〉をめぐるアレゴリー

帆苅基生

一、はじめに

石川淳の「アルプスの少女」は『文芸』一九五二年一一月特別号に発表された。本作はヨハンナ・スピリ原作の〈童話〉、「アルプスの少女」を素材に用いて〈後日談〉として書いたパロディである。

石川は「アルプスの少女」を書いた同時期に〈童話〉のパロディを断続的に発表しているが、山口俊雄はこれらを〈童話翻案作品〉と名付け、同時代状況を踏まえながら書かれたものと論じ[1]、石川版「アルプスの少女」にはサンフランシスコ講和条約を背景に「対米異存・対米従属的な「再独立」に対する批評的メッセージ」が読み取れると指摘している。

石川版「アルプスの少女」ではクララとペーテルが「虹」の美しさに心を奪われて見とれてしまう様子が書かれているが、『読売新聞』の一九五一年八月一九日の記事を見ると「太平洋に虹の架け橋」という題を掲げ、サンフランシスコ講和会議で日本が国際社会に復帰する姿を「虹」で形容している[2]。「虹」が平和や友好のイメージをもって使われているわけで、石川版「アルプスの少女」の「虹」もこのイメージと繋がり得るだろう。

そしてクララがその「虹」に見とれることを拒絶して〈山の下〉に下りる時「虹のようにうつくしい町をつくらなくちゃ」と言う記述を考慮するとクララの姿には空の上にある触れられない「虹」をただ眺めて平和を享受した気になるのではなく、さらに自らの手でそれを生み出すべきことも投影されているように思われる。なるほどここには平和・友好や国際親善の名の下にまやかしの〈平和〉の夢を見ていることへのアイロニーが

込められていると言えよう。

しかしその点に付け加えて論ずべきことは、この「アルプスの少女」はサンフランシスコ講和という同時代のトピックスに対する反応としてのみならず、戦後日本のあり方の根本を見つめた批評精神にあふれるものであったということだ。石川版「アルプスの少女」では主人公がハイジからクララに改変されている。その理由については歩けなかったクララが自らの足で立ち、そして再び自らの意志で立ち上がったという〈独立〉の物語内容を成立させるために不可欠な意味があるとも考えられるが、それを論じるためにもなぜハイジの姿が見えなくなってしまうのかを関連づけて論じる必要があるだろう。

石川が一連の〈童話翻案作品〉を書く際に、原作の理念を継承して書いているという意見もあるが、[3] しかし改めて〈童話翻案作品〉を読み直してみると必ずしもそうとは言い切れない場合があるように思われる。むしろ本作は〈後日談〉として原作を批評的に書き換えようとしている。その顕著な例が「アルプスの少女」である。数ある〈童話翻案作品〉の中で本論で「アルプスの少女」を取り上げる理由はそこにある。また「アルプスの少女」には石川の後の小説に垣間見られる批評精神の萌芽が見られ、単なる余技として書いたと軽んじることが出来ない点が見えてくる。そこでまずこれが〈後日談〉である点から考察し直してみたい。

二、評価の転倒

石川版「アルプスの少女」では、まずクララのことを「身の上ばなしはとうに筆まめの作者が絵本に仕立てて売りひろめた」と紹介し、原作との連続性が示される。[4] 原作との連続性を視野に入れると原作と石川版では、「牧師」に対する人々の評価が真逆のものになっていることに目がとまる。

原作における牧師は村の人々にとって精神的・思想的支柱であり、無二の信頼を寄せられている。村の人と折り合いが悪くなりアルムじいさんは〈山の上〉で暮らすようになるが、そもそものきっかけはアルムじいさんが日曜日の礼拝にも行かず、牧師に対して悪態をつくので村の人々が軽蔑するようになったからだ。

しかしこの牧師は、石川版「アルプスの少女」では「うそつき」で信用されなくなっている。「いくさ」が村を襲う様子を「高見の見物」をしていた時、牧師は「ながれダマ」の音に驚いて転落し「頸の骨を折っ」た。このような事態が牧師に降りかかった因果について、「長年うそをついたばちか」とあえて示される点からすると、牧師の「うそ」に人々が気づいたことが信頼を失った原因と考えていいだろう。

そもそも原作によれば教会の高い塔は、その先端に付けられた鐘が村に時刻を知らせる時計代わりであり、村人たちの日常生活において重要な役割を果たしていた。教会とその塔の鐘は

まさにこの村の時間と生活を〈支配〉する象徴的な存在であった。教会の塔は不可侵な場所であり〈安全地帯〉であった。だからこそ牧師はそこから「高見の見物」をして村の攻撃を眺めていたのである。

この「いくさ」はかつては村の人々からの絶大な信頼を得ていた指導者である牧師の真の姿を炙り出した。人格者として振る舞っていたその姿は虚飾に彩られた〈まがいもの〉であり、わが身は〈安全地帯〉である教会の塔に置き「高みの見物」をしていた卑怯者であることが露わにされる。人々からの信頼を失い、権威を失墜させるかのように、牧師は自らの権威の象徴である教会の高い塔から落ちていく。

牧師に関する記述は石川版「アルプスの少女」では二箇所しか出てこない。しかしだからこそあえて牧師の記述を入れたことの意味が見えてくる。この小説の発表時期を考えると「いくさ」によって虚飾まみれの姿が明らかにされた牧師の姿は、戦後になって戦時中の〈嘘〉が次々と明るみになったかつて国民に讃えられた〈指導者〉たちの姿と重ねられよう。[5]

三、〈主語＝主体〉の奪還

それでは原作の後日という連続性が設定されていることを踏まえて、改めてクララが主人公に置かれる必然性について考察したい。

クララが車椅子から立ち上がり歩けるようになったことと、クララが自らの意志を持つという慣用表現的な〈立ち上がる〉が重ねられるため、ハイジでなくクララが主人公になる必要が生まれてくると従来より理解されてきた。[6] しかしその説明だけでは「アルプスの少女」をパロディにしなければならないことの答えとしてはいささか説得力が弱い。

石川版「アルプスの少女」では「足」を主語にした文章が目立つという指摘がされているが、[7] 問題はなぜ「足」が〈主語〉となり、そしてどこでクララが〈主語〉となるのかである。

西洋語で〈主語〉という語は〈主体〉と同じ意味を持つことは言うまでもないが、それならば単に「自立」の問題としてではなく、もっと根本的な意味を持つのではないだろうか。クララの「足」が動き出したことが以下のように記されている。

> 足はどうしてもじつとしていられないといふ態度で、せつかちに、鳥の羽ばたくやうに、小さい靴をばたばたならした。（略）足がおこつてものをいつたやうであつた。

〈山の上〉に残りたいと願うクララに対して「足がおこつて」、「足」自らが行為主体となってクララに選択することを許さない。クララは自らの足に隷属するかのように振り回されることになる。[8] 意志を持って行動しているのはクララではなく「足」なのである。クララがどの時点で真に〈立ち上がった〉のかそれが問題ではないだろうか。

石川版「アルプスの少女」ではハイジが「はげまし助けてくれた」からクララは歩けるようになったと書かれてある。歩け

るようになった今、「車のついた不吉な椅子は永遠に谷底深く沈められた」と書かれてある。しかし原作でペーテルがクララへの嫉妬から小屋の軒先にあった車椅子を谷底に突き落としたことがクララの立たなくてはいけない事情を生んだ。それならば踏み込んで言えば、クララは自分で立ち上がりたいと少しも思わなかったのに、必要に迫られて立たなければいけなかった、と言えないだろうか。またこの箇所を注意深く読むとハイジが「はげまし」てくれたのは実はクララ自身ではない。

ここの小屋に住んでいたアルムじいさんの姪娘のハイジが、心をこめて、手を尽くして、いかなる名医もさじを投げたところのクララの足を立たせるようにはげまし助けてくれたおかげである。

この小説が主語にこだわりをもって書かれているとすれば、ハイジが「はげまし助けてくれた」のは、厳密に言えばクララではなく「クララの足」である。そう考えると「足」が主語となってクララから主体を奪っていくのも道理がある。始めからクララは本当の意味で〈立ち上がる〉ことなどできていなかったのだ。原作において、クララが立って歩けるようになるまでの過程はよく知られていることだが、石川版「アルプスの少女」は後日談としてそれを受け継ぎながら、クララが歩けるようになるまでの過程に新解釈を与えていると言えるだろう。自ら立ち上がれるようになったと見えるクララがその実いかに受動的な存在であったかが暗に示されているのである。

それでは流されるままに受動的、隷属的に動かされていたクララが主体を取り戻すのはどこか。

クララは焼跡に腰をおろした、久しぶりで、つかれた足を休めた。その足に、しびれるほど爰元の世界の土の味がしみていた。

これは「いくさ」が終わったと記述されるところである。ここでは「足を休める」のは「クララは」と動作主、すなわち〈主体〉がクララへと変わっている。

石川版「アルプスの少女」末尾では、クララが「うつくしい町」をつくるために決意して立ち上がった時、その足に「爰元の世界の土」が「ひからびた砂」となったものが光を放つ様子を描いて終わっている。クララにとってこの〈主体〉を取り戻した敗戦の経験こそが自らの足で〈立ち上がる〉原点となっているのだ。石川が同時代に書いた「革命とは何か」(『文学界』一九五一年八月号)というエッセイでは、石川は「負け戦」が人民が自らの手で「民主主義」を取り戻す、「千載一遇のチャンス」だったと主張する。その言葉と、自らの意志で山の下へと下りていくクララの姿が呼応する。

クララにとっては自分の思いではなく無理矢理「いくさ」に巻き込まれることになったわけだが、自らの意志で山の下に下りていくことを決意したその足には、支配や隷属から解放されて〈主体〉を取り戻したあの「いくさ」の〈焼跡〉の経験が刻み込まれている。[9] クララが主人公である必然はまさにここにあ

る。原作において〈立たされた〉クララが、自らの意志で〈立ち上がる〉という主体的な意志を示すようになる。ここに原作を批評的に書き換える後日談としての石川版「アルプスの少女」のクリティカルな一面が見て取れる。[10]

四、〈ユートピア〉の拒絶

クララが〈拒絶〉した〈山の上〉は「すべて申し分なし」い美しい〈ユートピア〉のように描かれる。それゆえにそこに安住するだけでは堕落してしまう「退嬰的」な場ともなり得ると論じられてきた。[11] 対して〈山の下〉では「いくさ」が起こり「真夜中がつづく」空間である。まさに山の上下が光と闇の対立として書かれているように思われる。しかし改めて読み直してみると、単純に二項対立として捉えられないものが出てくる。

石川版「アルプスの少女」でクララは「さじを投げ」られたと暗に示しているところからもそれはうかがえるが、様々な治療を受けても治らず、扱いに困った家族がせめて健康な体にして欲しいと山に預けたためクララは山の上に住むことになった。ハイジもまた両親を亡くし親戚の家で育てられていたが次第にお荷物になり山の上のアルムじいさんに押しつけられている。アルムじいさんもまた村から排除されることで山の上にこもっている。山の上に彼らが固執するのは、山の下という〈現実〉の世界から目を背けているに他ならない。山の上は山の下に居場所がなかった者たちにとっての自分たちだけの閉じられた〈ユートピア〉であったのだ。

当初クララはこの〈ユートピア〉を「すつかり、気に入つていた」。だからこそ山の下で「いくさ」に巻き込まれた後、「いくさ」が終わると、クララは山の上に帰ってハイジに会おうと真っ先に思うのである。山の上に戻るクララは「胸をときめかし」ている。この場面は原作で慣れない都会の暮らしでホームシックにかかり心神衰弱になったハイジが山道を上る時と重ねられている。すでに児童文学研究の立場からも指摘されている[12]ところだが、フランクフルトから戻ったハイジは天真爛漫な山に来た当時の姿からは成長し、原作者の保守的なキリスト教的な道徳観を背負った山の家の小さな主婦として働きだす。だからこそアルムじいさんに教会に行くように勧め、クララに世話を焼く。ハイジにとって山の上は自らの居場所であった。

「いくさ」に巻き込まれて疲れ果て山の上に戻るクララの姿は、かつてのハイジと重ねられている。一見すると山の下の世界で傷ついた心身を癒やしてくれる、山の上は理想郷のように思われる。しかしハイジが山の上に自分の居場所を見つけ活き活きと暮らして行くのに対して、最終的にクララはこの山の上を捨てることを選ぶ。二人の山に帰る姿が重ねられながら、結果にはズレが生じる。ここに単純な二項対立が崩され、「完全」であると思われた〈山の上〉が〈山の下〉という現実から逃避することで成立する〈まがいもの〉の〈ユートピア〉でしかないことが示されるのである。

クララが「いくさ」から山の上に戻った時、姿が見えず〈消えてしまった〉ものがある。それは「高見の見物」をしていた牧師と、そしてハイジとアルムじいさんであった。この三人に共通するものは「いくさ」に巻き込まれていないということだ。

牧師が教会の塔にこもって「高見の見物」をしていたように、ハイジとアルムじいさんも戦争中ずっと〈山の上〉にこもっていた。教会が戦禍に遭わなかったのと同様に〈山の上〉も「旧にかわらな」いままである。牧師が塔から落ちていなくなってしまったように、ハイジやアルムじいさんの姿も消えてしまっている。

クララたちが再び山に戻った時、ハイジらしい姿を見つけるが空の「虹」へと変化してしまう。先に「虹」は手に入れたようでただ眺めるだけの〈まがいもの〉の〈平和〉のシンボルでしかないと論じた。ハイジの姿が「虹」になったのだとすれば、ハイジの存在も同様に〈まがいもの〉であることにクララは気づいたのではないか。「いくさ」から戻ったクララはかつて「申し分な」いと思っていた〈山の上〉とハイジの正体に気づいたのだ。「クララもいくさで苦労したせいか、だいぶませた」と語られるように、クララも「いくさ」に巻き込まれるという不条理を経験したことで成長した。しかしその間〈まがいもの〉の〈ユートピア〉である〈山の上〉で過ごしていたハイジやアルムじいさん、そして教会の高い塔で「高みの見物」をしていた牧師は「いくさ」の苦しみを直接味わうことがなかったことを成長したクララは気づいてしまったのだ。クララが「いくさ」でいかに大変な思いをしたか以下のように表現されている。

それからクララがどのようなひどい目に遭ったか。ケダモノでない人間ならば、人の話を聞くまでもなく、たれでも身にしみて知っているはずである。

これは終戦から七年ほどしか経っていないので、読者もクララの経験が分かるはずであると語り手からの呼びかけのように思われる。しかしここで気になるのは、「いくさ」の苦しみを共有できるのは「ケダモノでない人間」であり、「人間」ならば「たれでも身にしみて」いると語らせているところだ。言い換えれば「いくさ」の苦しみを共有していないものは「人間」ではなく、「ケダモノ」であると言っている。戦争に巻き込まれたかどうかの有無は別として、その苦しみを感じとったり理解することのないハイジやアルムじいさん、そして牧師は「ケダモノ」であると示されている。このように見てみるとクララが山を捨て「町」に自らの足で下りてくということの必然性が見えてくる。現実から逃避した空間で、他の人々が困難な〈現実〉の中を必死で生き抜いている中で、自分たちだけ安住して生きている姿はクララにとって「ケダモノ」として忌むべきものであり、クララは〈山の上〉とハイジのような現実から目を背ける生き方を〈拒絶〉するのである。

五、〈焼跡〉の砂

原作でフランクフルトから〈山の上〉に戻ったハイジは小さな〈母親〉の役割を担っている。それを受け継ぐ石川版「アルプスの少女」でハイジの様子が直接描かれるところはない。だからこそハイジの姿が示される部分は注目すべきである。ハイジの献身的な介護はクララの「足を」立ち上がり歩けるようにして結果的に戦場に送り出すことになった。また嫌がるペーテルが「政府の例の暴力」によって戦場へと向かうことになった時、ハイジがそれを止めてくれたことが少しも書かれていない。一見〈平和〉の象徴である〈山の上〉のハイジであるが、結果的にクララやペーテルを戦場に送り出すことに加担している。それにも関わらずハイジ自身は「旧に変わらず」に〈山の上〉の生活を享受しているのだ。

クララが危険を感じ捨てたのはまさにこの「旧に変わらない」生き方だった。「いくさ」の〈焼跡〉は絶望であるが同時に新しく作り直す機会でもあったのだ。それにも関わらず「旧に変わらない」ままでいるハイジに対して、クララはそれを〈拒絶〉し新しい一歩を踏み出そうとする。

石川版「アルプスの少女」で〈焼跡〉の砂が書かれるのは、石川自身の戦後の文学活動のスタートを切った「焼跡のイエス」(『新潮』一九四六年一〇月)の〈焼跡〉のイメージと無縁であるとは考えにくい。山根龍一が石川淳の「焼跡のイエス」がGHQの占領政策を背景に書かれているという指摘をしているのが興味深い。山根は浮浪児を「「救済」「保護」の対象と一方的にみなし」、「公権力が」浮浪児たちの身体を「管理統制することに付帯する暴力性が可視化されない」状況が作りだされていたことを指摘し、そのような「保護」の枠組みから自由でありながら焼跡の闇市を闊歩する「焼跡のイエス」の浮浪児の姿は救世主イエス・キリストとして見出されている。そこに「GHQ/SCAPを、救済する主体の位置から追い落としてしまうのだ」と論じている。[13]

ここで山根が論じる「焼跡のイエス」のイメージがクララに引き継がれているのであれば、かつて歩くことができず「救済」「保護」の対象」として、ハイジによって無理矢理立ち上がらされたクララが〈主体〉を回復する様子に重ねられていると言えよう。

それではハイジはどうか。小さな〈母親〉としてクララを「救済」「保護」しようとクララの「足を」を「はげまし」て結果的に戦場に送り出した。ハイジの姿は子供達を戦場に送り出す愛国の母の姿にもなぞらえられよう。[14]「救済」「保護」の美名の下、「保護」されているようだが、「保護」する側の枠組みの中へと取り込まれており、その中にいれば結果的に〈主体〉を喪失しているのである。このように石川版「アルプスの少女」を読めば「いくさ」の前「保護」の名の下で戦場に送り出したものが、「いくさ」の後は今度は〈平和〉の名の下に取り込まれ

世界情勢のある一定の枠組みの中に組み込まれてしまった姿と重なる。

六、自己の運命を決定する

もう一つ付け加えて言わなければならないことがある。それはハイジ自身が自らの姿を消して「虹」へとなり自らの存在を消失しているという皮肉な事実である。

ハイジが結果的に〈主体〉を喪失していく姿を同時代に当てはめれば、それは昭和天皇の姿に重ねられもする。戦時下、多くのものを戦場に送り出しながら国体を護持する方策を練るために多大の時間を要し、結果的に空襲や二度の原爆投下が行われる。しかしその守られた〈国体〉そのものが政府や軍部によって祭り上げられたもので、結局は責任を取る主体がどこにもない「無責任の体系」ができあがったのである[15]。

昭和天皇は〈責任〉を問われることすらなかった。なぜならこれも天皇を戦争責任者として処罰するよりも、日本国民の代表として立てて〈利用〉する方が日本の占領統治を上手く進められるという政治的な判断が働いたからである。諸外国の天皇の戦争責任を追及する声を和らげ、そして国民の代表者として民衆に近づけるために一九四六年の元旦にGHQの強い指導のもとに出されたのが「人間宣言」として知られる「新日本建設に関する詔書」であった。「人間宣言」のアピールとして天皇が戦争で傷ついた人、夫や親を亡くした人のもとに巡幸し慰める姿が報道される。民衆〈国民〉に近い天皇をアピールするために国民を癒やす存在として演出されるようになる。あたかも〈山の上〉のハイジが小さな〈母〉として振る舞い、クララを「はげまし」てくれたかのような姿がメディアに流通することになる[16]。原武史は国民を癒やす存在としての天皇像によって「支配する主体、支配される客体が緩和される形」が作り出されたと指摘している[17]。しかし同時に「天皇と臣民の一体化という戦前の光景」が見た目を変えただけで継続されることになったとも論じている。併せて言えば少なくともこのような天皇像がGHQの〈意向〉に合致していたことは言うまでも無い。しかしその意向も国際政治の状況が変わってくるとそれと平行して〈求められる〉天皇像も変化することになった。

GHQの直接の統治が終わり国内情勢の様々な不安定要素を除去する必要に迫られた政権は新たな統治権威として〈象徴天皇制〉を再編成し、国家そして国民の一体化を図ろうと画策する。そこで天皇及び皇室を再び「精神的・道徳的中心」に据える必要があり、日本の精神文化のルーツを天皇が巡ることで〈中心〉の具体的イメージを与えるという目的のため行われた重要なページェントが京都巡幸であった。

京都巡幸の一環で行われた京都大学への訪問の際、天皇の来学の予定が公表されたのに際し、京都大学自治会が出した「公開質問状」が興味深い。

この質問状では「人間宣言」をしたはずの「「人間」である

天皇が統治のために政治権力に利用され、人間性を犠牲にしていることに対して」まず「同情」が示されている。しかし「同情」を示しつつも先の太平洋戦争の「軍国主義」の支柱となったことを思うと「同情していることができない」と書かれている。そして単独講和と再軍備の現在の状況下でかつてと同じような「イデオロギーの支柱」になってしまわないのか、そうならない為に「個人」としてどのようにそれに向き合うのかと問いかけている。そして「平和な世界のために、意見をもった個人として、努力されることに希望をつなぐものである」と書かれている。

しかしこのような意見は、天皇制存続支持が大多数を占めていた状況を考えるとメジャーな意見であったとは言えない。[18] しかし石川版「アルプスの少女」が書かれた同時代にこのような意見を表明する集団がいたことは、逆に言えば誰もが〈天皇制〉を手放しで支持していたわけではないという証左にはなろう。

「旧に変わらない」〈山の上〉の世界に生きるハイジは姿が消えている。「いくさ」の前も「花」としてしか写らず、「いくさ」の後は「虹」へと変わり、ハイジという〈主体〉を持った個人は消失している。ただ残るのは〈山の上〉という空間だけである。つまり〈国体〉あるいは〈象徴天皇制〉はそのまま戦前戦後見た目を変えて存続し続けるが、そこには〈主体〉をもった〈個人〉は存在しないという痛烈なアイロニーが示されている。

だとすると一九四九年九月の『近代文学』で佐々木基一のインタビューに答える形で、石川が「僕の政治談は、第一に天皇制の廃止だね。隠居所をこしらへて引つ込んでもらふ、そんなのぢやない。この制度を叩きつぶす。それを一回だけ認める」という発言との整合性が見えてくる。ここで石川は「天皇制廃止はひと事ばかりぢやない。自分のなかにあるもの、自分のなかの権威をぶち毀すことでもあるからね。その意味でも、僕はただの打倒論ぢやなくて、衆人環視の中での叩きつぶし論だ」と語っている。石川がここで言っているのもイデオロギーの「支柱」として持ち上げられてしまう「権威」と、そしてその「権威」を持ち上げてしまう自らのなかにあるものを「ぶち毀すこと」の必要性である。石川がここで「衆人環視」と言うのは、姿の見えない存在としての〈天皇制〉ではなく、〈主体〉ある〈個人〉として天皇の存在を認識するからこそ「権威」を「叩きつぶし」にできると言っているのであろう。

再び石川版「アルプスの少女」に戻ると、クララは〈山の上〉とハイジの本性が〈主体〉や〈自主性〉なく動かされる「ケダモノ」であることに気づかされる。クララは自らの中にある〈山の上〉というある種の依存対象である「権威」を〈拒絶〉することで新しい可能性が生まれることを見出していくのである。

石川版「アルプスの少女」で暗示したことは、約二〇年後、一九七五年の一〇月三一日の昭和天皇が米国訪問の際、記者から自身の戦争責任について問われた時のいわゆる「言葉のアヤ発言」と呼ばれる発言を予見するものであったのかもしれない。

昭和天皇の「そういう言葉のアヤについては、私はそういう文学方面はあまり研究もしていないのでよくわかりませんから、そういう問題についてはお答え出来かねます」という発言に対して、藤枝静男が強い「怒り」を表明している。藤枝は担当していた『東京新聞』の「文芸時評」（一九七五年一一月二八日夕刊）にて「これは文芸時評ではないが無関係ではない―天皇の生まれてはじめての記者会見というテレビ番組を見て実に形容しようもない天皇個人への怒りを感じた。哀れ、ミジメという平生の感情より先にきた。いかに『作られたから』と言って、あれでは人間であるとは言えぬ。天皇制の『被害者』とだけ言ってすまされてはたまらないと思った」と「文芸時評」であるにも関わらず時事に触れ怒りを露わにしている。ここで藤枝が怒っているのは、戦争責任に対して無責任であったからではない。「人間であるとは言えぬ」という点であろう。「言葉のアヤ発言」については様々な研究・論評がされているが、憲法の象徴天皇制下において天皇が〈個人〉として戦争〈責任〉の有無について答えられるような立場になかったため、あのような発言になったのだろうという見方もされている。しかし藤枝はこの自らの〈責任〉について言及することができない〈非人間的〉な振る舞いに何とも言いようのない「怒り」を感じていると言えるだろう。

これより約二〇年前に〈人間〉ではないものを「ケダモノ」と呼ぶ、石川の「アルプスの少女」において〈天皇制〉の中心にいる天皇が〈個人〉としての〈主体〉が無いことを感じ取り暗示していたと言えるだろう。同時に〈象徴天皇制〉において天皇が〈象徴〉しているものは、言うまでもなく日本国と日本そのものであった。天皇が〈主体〉の無い、〈非人間的〉な存在なのであれば、それによって〈象徴〉される日本そのものもまた〈主体〉無き存在なのである。

一九五〇年六月二五日に朝鮮戦争が勃発し、アメリカの占領政策の転換を促したことは知られている。アメリカの都合によって主導され日本そのものも国際社会の枠組みの中に組み込まれていく姿はまさに〈主体（主権）〉が無いのも同然である。

このような状況を踏まえると、クララの足の砂に、さまざまな可能性があった〈焼跡〉の原点に立ち返ろうと暗示されているのが分かる。クララは単なる〈復興〉のために山の下に向かうのではないということだ。クララは「むかしよりもみごとな」町を創造する決意を述べている。古い姿を取り戻すのではなく「むかしよりみごとな」ものをつくるためにクララは向かうのである。

「むかしよりもみごとな」ものが求められる背景として、〈単独講和〉が既定路線となって進められていく状況を指している。このような〈単独講和〉路線が日本をある一つの立場の中に組み込み結果的に平和を脅かすものになるという危機感から、一九五〇年一月一五日に平和問題談話会が発表した「講和問題についての平和問題談話会声明」が『世界』の一九五〇年三月

号に掲載されている。この声明の冒頭で述べられているのが先の戦争が開始される時「われわれが自ら自己の運命を決定する機会を逸した」ことを改めて反省し、そして「今こそわれわれは自己の手を以て自己の運命を決定しようと欲した」と表明されている。その上で「平和への意志と祖国への愛情とに導かれつつ、講和をめぐる諸問題を慎重に研究し、終に各自の政治的立場を越えて、共通の見解を発表するに到った」と述べている。そこで導き出された結論が全面講和による平和でなければ、日本の政治的経済的自立も達成し得ないという彼らのよく知られた主張であった。この結論を出す前提となっているのが、「自己の手を以て自己の運命を決定」するという意志である。

クララが「虹」を眺めるだけで平和を享受した気になっている状態に気がつき、それは「あぶない」ことだと悟った。クララの目覚めは単に〈自立〉、あるいは独立の問題という表層の部分に限らない。もっとその根っこにあるのは、自らの〈主体〉を奪還し、そしてそれを土台に〈自己決定〉していくことができるのかという問題だろう。石川版「アルプスの少女」は鋭い警鐘を鳴らしている。

七、おわりに

石川版「アルプスの少女」は以上考察した通り、童話のパロディでありながら同時代状況を見据え鋭い批評的メッセージを発している。それは講和・独立の名の下で進められる隷属化という同時代のトピックと併せて、日本の〈象徴〉たる天皇あるいは〈天皇制〉が〈主体〉無き存在であり、それを仰いでいるだけならば、自らの足で立つことなのできないという強烈なアイロニーを含んだものであった。

石川の小説の中で「アルプスの少女」のような〈童話翻案作品〉は、同時期に書かれる〈革命小説〉のセカンドラインのような位置づけをされているが、むしろ石川の作品史の中において照らしてみるとここでの経験が後の小説へと注ぎ込まれている。「アルプスの少女」を始め、これは〈童話〉を素材として扱いながら、むしろ子供ではなく大人の読者のために書いている。だとすると〈童話翻案作品〉が書かれていた時期の直後に石川独自の〈解釈〉を盛り込んで現代語訳され、後に『新釈古事記』[19]としてまとめられる作品が当初「神神―古事記物語」と題されていたのも、〈子供のため〉に書かれた鈴木三重吉の『古事記物語』[20]を、〈大人のため〉に批評的に書き換えていたと見られる。そして『新釈古事記』の経験が後に〈正史〉をパロディにするという小説へと発展したことを思えば石川淳の文学活動の中で〈童話翻案作品〉での経験は後に繋がる貴重なものであったろう。

山口俊雄は変革のプロセスそのものを虚構として書く〈革命小説〉と違い、〈童話翻案作品〉は原作を用いながら「変革の前提となる理念を謳いあげた作品群であった」と評しているが、本論で「アルプスの少女」を論じたように後日談として設定さ

れることが、原作への批評ともなっている。とすれば石川の一連の〈童話翻案作品〉は理念を継承するよりも、原作を批評的に書き換えようとしたと見ることができる。それぞれの詳細な分析は改めて行う必要があるが、少なくともここで言えるのは石川版「アルプスの少女」には原作の後日談にかこつけて批評的に原作を書き換えて痛烈なメッセージを送るという試みを果敢に行ったということであり、石川淳の文学活動の中で改めて評価し直す必要があるのだ。

注

（1）山口俊雄「石川淳・童話翻案作品論—時事性とパロディと」（『愛知県立大学文学部論集国文科編　第55号』二〇〇七年三月）

（2）ここでは「サンフランシスコはいまや日本とアメリカを結んで太平洋にかける親善の虹のかけ橋のその一基点になろうとして街をあげての感動に包まれている」と特派員からの報告を伝えている。

（3）石川の〈童話翻案作品〉は全て『文芸』誌上に掲載されている。「アルプスの少女」の他には、「小公子」（一九五一年六月）、「蜜蜂の冒険」（一九五二年一月）、「乞食王子」（同八月）、「白鳥物語」（一九五三年四月）、「家なき子」（一九五四年三月）、「愛の妖精」（一九五五年三月）がある。

（4）スピリ原作の「アルプスの少女」は、一九二〇年に野上弥生子によって『ハイヂ』として翻訳されたのを初め、戦後になって吉田絃二郎らにより「アルプスの少女」と改名されて翻訳され一般に定着した。

（5）付け加えて言えば、この石川版「アルプスの少女」が書かれる頃、かつて失墜したはずの〈指導者〉たちが再び復権し始めていることは見逃すことができない。

（6）青柳達雄『石川淳の文学』「第2章石川淳の作品　二「アルプスの少女」」一九七八年八月笠間書院）が早くから指摘している。

（7）前掲の注1の山口、注6の青柳は〈主語〉が「足」になっているという点に関して触れている。

（8）クララと同じくペーテルも〈山の下〉へと無理矢理下ろされているが、それについては「政府が例の暴力で」と〈徴兵〉された様子が書かれている。クララもペーテルも〈暴力〉に晒された状態であると言える。

（9）石川は「負けいくさ」の経験というものに立ち返る必要性を繰り返し語っている。例えば一九六六年七月にラジオ出演した際も「負けいくさの直後に振り出しに戻ってやり直せって言ったって出来るわけではないし。（略）日本じゃこないだの負けいくさが（亡国の経験：引用者注）初めてみたいなものでね、もう二、三度滅びないとはっきりしないでしょうね。」と冗談めかして語っている。

（10）また論争と同時期に起こった「戦後主体性論争」（一九四六～四八）との関わりも考慮する必要があるかもしれない。荒正人は「第二の青春」（『近代文学』一九四六年二月）において、戦前（「第一の青春」）ではヒューマニズムという理念はファシズムの嵐の中で無力であった。それを反省し、「第二の青春」の今、自らの生・個

人的実存を立脚点にして主体を再構築する中でヒューマニズムを確立することの必要があると唱えている。

(11) 菅原実「石川淳『アルプスの少女』小論」(『かながわ高校国語の研究』一九九一年一〇月)

(12) 児童文学翻訳大事典編集委員会編　川戸道昭(第1巻主幹)『図説　児童文学翻訳大事典　第1巻【図説　日本の外国児童文学】』二〇〇七年六月大空社)

(13) 山根龍一「石川淳「焼跡のイエス」論—被占領下における「倫理」の可能性をめぐって」(『総合文化研究　第一八巻第一号』二〇一二年八月)

(14) 加納実紀代が「天皇と母はともに「愛」の名によって息子たちを国家に動員し、戦場に送り込んだ。「兵隊さんのためにと白いかっぽう着でまめまめしく世話を焼く国防婦人会の女たちは母性の象徴と見えた、結果的には男たちを死地に発たせる役割を果たしたのだ」(「母性天皇制とファシズム」『天皇と王権を考える』第7巻二〇〇二年九月岩波書店)と論じるところに通じるものがある。

(15) 丸山眞男『現代政治の思想と行動』(上・一九五六年一〇月、下・一九五七年三月　未来社)

(16) 河西秀哉『「象徴天皇」の戦後史』(二〇一〇年二月講談社メチエ)では、こうした像がメディアに流されることで、戦争責任者ではなく国民の側に天皇がいたということを演出する目的もあったと指摘している。

(17) 原武史『昭和天皇』(二〇〇八年一月岩波新書)

(18) 前掲注(16)の河西によればこのような「公開質問状」は天皇の戦争責任と退位論がくすぶる中で出されたもので、再び「支柱」となって戦前イデオロギーを復活させないためには「退位」と「天皇制の廃止」が不可欠であるという主張されたものだった。ただし付け加えれば当時例えば一九四八年八月一五日の『読売新聞』の世論調査では、八割が天皇制存続と昭和天皇の留位を希望している。

(19)『新釈古事記』は当初「神神—古事記物語」と題し、東洋経済新報社刊行の総合雑誌『総合』に一九五七年五月創刊号から六回にわたって連載された。その後中断を経て筑摩書房から一九六〇年に刊行された『古典日本文学全集』の第一巻に、残りの部分が書き下ろされて完成する。

(20) 鈴木三重吉『古事記物語』(一九一九年一一月赤い鳥社)

＊本稿引用の石川淳の文章は筑摩書房版『石川淳全集』(一九八九～九一)に依った。また引用箇所の旧漢字は新漢字に統一した。

(ほがり・もとお／本学非常勤講師)